

も

この出来栄を担保する方法として、し
くみを整備する考え方と、ひとを信頼す
る考え方がある。ISOの品質マネジメントシ
ステムなどは、契約社会のアングロサクソンに
よって生み出されたしくみの典型であろう。ひ
とに頼るよりはしくみを構築する方が近代的で
あり合理的であると見做されているようである。
大学教育もそのような傾向にあり、一学期の
講義は必ず十五回行うようにという強制的な指
示が、全国の大学で今なされている。建築の講
義には様々な分野があるが、全ての分野におい
て十五回で一つのまとまりとすることが適切で
あるとは、到底考えられない。十五回の講義を
受講すれば一つの単位を取得するというしくみ
であり、誰が教えるかは問題とされていない。
そのようなしくみを進めれば、ハーバードのマ
イケル・サンデル教授のような講義は期待でき
ないであろう。そもそも、しくみによるコント
ロールは、形式に陥る危険性がある。

公共工事などでは、誰が造っても、設計図ど
おりに造れば同じものが出来上がるという前提
のしくみで発注が行われている。価格競争は必
要であろうが、その結果、よりよいものを造ろ
うというインセンティブが働きにくいしくみに
なっている。近年の総合評価による選定には、
技術者の評価が入っているものの、その人の、
よりよい物を造ろうとする意欲は評価されてい
ない。しくみのもつ限界である。

各 人 各 説

「しくみ」か「ひと」か

首都大学東京 都市環境学部 教授

深尾精一

Seiichi Fukao



このような状況では、建設業界を支える人材
は育ちにくいのではないだろうか。建設現場で
も、以前は現場所長をはじめとして、技術者が
さまざまな創意工夫をしても造りを行ってい
たが、そのような傾向が減ってきたと聞く。

そのような事態の打開の方法として、建設に
携わったひとを何らかの形で記しておくとい
うのはいかがであろうか。日本には、古来、建築
主の名とともに、大工棟梁の名を棟札に記し、
小屋裏の普段は目につかないところに残してお
く風習があった。古建築では、それとは別に、
携わった職人の名前などの痕跡が、小屋裏の部
材などに残されていることもある。自分の作品
であるということを他人に誇るためではなく、
己が造ったという自負を留めたかったのである
う。

そのように、出来上がった建造物のどこかに、
工事に携わった人の痕跡を残してはどうであろ
うか。目立たなくて、知る人ぞ知るところ
に記せばよい。よい仕事をしたはずだという思
いを何らかの形で残すことができれば、責任を
もったよい仕事をする意欲が増すであろう。公
共工事を担う土木の分野では、設計者さえも表
に出すのはいかがなものかという声もあるとい
うが、人材育成の点からみても、有効ではない
だろうか。へたなししくみよりも、ひとに期待す
るほうが、結果として、よりよい社会資産を残
すことにつながると私には思えるのだが。